

論文題目：日本・台湾における高齢者福祉の形成

—意識/制度・政策/実践—

The Formation of the Welfare System for the Aged in Japan and Taiwan

著者：龔玉齡（コン・イーリン）

研究科、専攻名：人間文化科学研究科生活文化学専攻

学位記番号：人文課第5号

博士号授与年月日：2005年3月23日

【論文の要旨】

日本と台湾を高齢者介護の面で比較してみると、制度的には大きな差異がある。家族介護から社会的介護へと、そのあり方を大きく転換させた日本の介護保険制度は、いつでも、どこでも、だれでも利用できる在宅介護支援の整備を目的として構築された。これに対し、台湾における高齢者の生活保障には、普遍的に受給できる年金制度がなく、高齢者の多くは家族介護に委ねられている。

本論文では、高齢者の扶養・介護に類似の背景（家族観、社会倫理、社会意識など）を持つ台湾と日本について、客観的なデータに基づいて現状を分析し、また、高齢者の家族による日常的サポート実態と、施設内での介護実態を明らかにすることによって、台湾における今後の課題を究明し、将来を展望したいと考えている。

現在の台湾の介護現場で問題視されているのは、経済的負担よりも要介護老人へのケアや、老人痴呆症がもたらす医療コストおよび介護依存の増大である。これらは、家族の扶養機能が低下し、家庭における老親介護が維持できなくなったことに起因するが、この点は日本とも共通している。

一刻も早い制度の確立が求められるが、台湾で保険制度を築くまでの道のりは遠く、家族扶養の原則の下で政府と家族の間でどうバランスを取るかが鍵となってくる。

老人福祉対策の本質や機能を明らかにし、問題を解決するために、他国の制度や経験を鏡としてみずからの不備を照らし出して、それぞれの社会に適合するための適応の作業が行えることは、比較論的考察の有効性を示すものでもある。

そのため、本論文では台湾と社会的・文化的背景において類似点が多い日本を比較の対象とすることによって、この課題を果たしたい。

本論文の論点は台湾と日本における私的サポートと公的サポート、つまり、家族と社会保障および社会福祉の比較であるが、それを通して台湾にとって、適合的な制度・対策を探ることが考察の最終的に目指すことである。

本論文では台日両国の高齢者サポートに問題が生じた条件を、高齢(化)社会の背景から分析し、中心的な課題である①経済保障、②医療保障、③介護保障、④高齢者の日常生活行動での家族のサポートなどにアプローチする。

論文の構成は以下の通りである。第一章は、高齢化社会と高齢者問題について論じ、第二章は老人福祉の歴史と福祉法の制定を考察する。第三章では、歴史・文化における家族

サポートのパターンと変遷および高齢者の経済源の実態を取りあげる。ついで第四章で医療保障を取り扱った後、第五章では、台湾における介護保険導入の可能性を探求したい。その後、第六章では高齢者介護・扶養に関する事例調査の結果を述べる。最後の第七章においては、以上各章の議論を踏まえて、抽出した両国の特性を要約し、台湾の今後の高齢者対策のあり方を展望して、総まとめとする。